

広島大学高等教育研究開発センター主催

研究員集会第2部「『責任ある・使命ある大学』の将来像を語ろう」

私の主張：高等教育のあるべき姿

青野篤子（人文社会科学系学協会男女共同参画推進連絡会（GEAHSS）前委員長／福山大学名誉教授）

タイトル：人文社会科学とジェンダーの視点から

概要：「科学＝自然科学＝男性の分野」という根強いステレオタイプがあるため、人文社会科学系分野は二流の学問とみなされ、人文社会科学系に属する女性は三流の研究者とみなされる。人文社会科学分野の重要性とジェンダー平等を訴えたい。

スピーチ内容：

私の専門は社会心理学で、とりわけジェンダーにかかわる問題を研究してきました。日本心理学会では、ジェンダー研究会とジェンダーの発表部門の設置などに関わり、現在は理事、男女共同参画推進委員として活動しています。2年前に大学を定年退職しましたが、2017年から2年間は人文社会科学系学協会男女共同参画推進連絡会（通称ギース）の副委員長、その後の2年間は委員長を務めました。そういった経験をふまえて、人文社会科学とジェンダーの視点から、高等教育の課題について提案させていただきます。

人文社会科学系（文系）は、長年、科学技術基本法が規定する「科学」の範疇には入れられませんでしたが。科学振興の名目で、研究者支援は自然科学系（理系）の方に肩入れされてきました。リケジョ・プロジェクトはその好例でしょう。しかし、この政策は限定的な効果しかもたず、リケジョは特別な人たちとしてサブタイプ化され、女性全体の底上げには寄与しませんでした。職業志望や将来展望よりも数学や理科の成績いかんで理系・文系のコースを選択する傾向にますます拍車をかけたのではないかと危惧されます。

一般社会にも理系は男性向き・文系は女性向きという根強いステレオタイプがあり、実際に理系分野に比べて文系分野の女性比率は高い傾向にあります。これが、人文社会科学系のジェンダー問題には光が当たりにくかった理由の一つになっているように思います。人文科学・社会科学の中でも女性研究者の比率にはかなりの変動がありますが、全体としては50%には至らず、とくに社会科学は理系の医学・歯学とほぼ同じくらい低いレベルを示しています。2017年に実施された人文社会科学系研究者の男女共同参画実態調査では、女性研究者は、男性研究者と比べて研究時間が少ない、職階が低い、非常勤比率が高いなど、キャリア形成が困難な状況が明らかになりました。調査結果をふまえ、ギースは2020年4月に「人文社会科学分野における男女共同参画推進に向けての要望」を内閣府男女共同参画局へ提出しました。その結果、第5次男女共同参画基本計画には、目標とする女性研究者の新規採用比率が人文社会科学系についても明記されました（2025年までに人文科学系：45%、社会科学系：30%）。

しかし、ジェンダー平等は、女性研究者の比率を上げればよいという単純な問題ではありません。そこで、ジェンダー平等の実現に向けて取り組むべき課題を4つ提案します。

1. 科学の再定義・人文社会科学の再評価 人間社会の問題を解決していくには人文社会科学が不可欠です。イノベーションに役立つ科学をめざすのではなく、イノベーションの価値を問い直す研究が人文社会科学の真骨頂ではないでしょうか。

2. 学問分野を超えた連携 理系／文系，人文科学／社会科学という区分は見直すべきでしょう。文理融合が進み，人文科学と社会科学の学際領域に位置する新たな学問分野が生まれているのもその根拠となります。

3. ジェンダー研究・ジェンダー学の推進 科研費審査区分として，細目「ジェンダー」が廃止され，現在は限られた分野にのみ，小区分「ジェンダー関連」が置かれています。これをあらゆる中区分に拡充すること，また中区分「ジェンダー」を設置することを要望します。

4. 学問・科学者コミュニティの閉鎖性を打破すること 科学や学問は一般の人々に開かれたものであるべきです。そのためには，高等教育の門戸を広げ，ジェンダー格差をなくす必要があります。また，科学者コミュニティとしての日本学術会議は，その透明性・公平性・脱権威性を担保することが必要だと思えます。